

毎日新聞 2月4日号に 掲載されました。

NISSO
メディア
掲載情報

江戸後期 草双紙の舞台 厚木の妙伝寺

江戸時代後期に相模国磯部村(現在の相模原市南区磯部)に住んだ草双紙の農民戯作者、仙客亭柏琳(本名・荒井金次郎)が書き下ろした「星下梅花咲」の舞台となった相州・依知村(厚木市上依知)の日蓮宗・星梅山妙伝寺に、



釈迦堂の南側で咲く紅梅「星下りの梅」を感慨深そうに見上げる荒井さん

鎌倉時代から「星下りの梅」と伝わる梅の子孫が今も息づいている。柏琳から5代目の日相印刷(相模原市南区麻溝台)会長、荒井徹さん(78)が寺を訪れて紅梅を感慨深げに見上げ、柏琳の足跡をしのんだ。
【高橋和夫】

「星下りの梅」脈々 開花

寺の縁起によると、寺は北条時宗が鎌倉幕府の執権当時、佐渡守護代だった本間重連の屋敷に日蓮宗の宗祖、日蓮を開山として創建された。日蓮は1271年9月、邪宗と批判された他宗からの訴えで法難に遭い、佐渡へ流罪となった。本間の屋敷に佐渡へ出立するまで28日間滞在。明月の夜、お経を上げると、梅の枝に星が降る不思議な出来事が起きたとされる。本間は日蓮に帰依し、屋敷を寺として献上した。梅は「星下りの霊梅」とあがめられてきた。

寺の伽藍は創建当時のまま。江戸時代に一時途絶えたが、日蓮を尊崇する水戸家・徳川光圀の力添えて再興され、釈迦堂や二天門が建立された。荒井さんは頼類や郷土史家らと寺を訪れ、副住職の宇都宮行厚さん(44)から霊梅や寺の縁起の説明を受けた。紅梅は枯れた古木の脇に2本あり、1755年と明治時代に設けられた二重の石囲いで保存されている。一寺伝では鎌倉時代の梅が連

綿と受け継がれて残っている」との宇都宮さんの話を聞いて、荒井さんは「柏琳が見た霊梅の子孫や釈迦堂などの伽藍が今もあって、とてもうれい」と、感慨に浸っていた。荒井さんは日相印刷社長を務める弟の功さん(76)と「柏琳の顕彰と先祖の霊に」と昨年秋、

農民戯作者「柏琳」の子孫 感慨

相模原・荒井さん

星下梅花咲は「妙伝寺利生物語」が副題で、柏琳が31歳で著した草双紙2作目。1834年に木版刷りの和じ本として発刊された。江戸で人気の戯作者、柳亭種彦が監修し、浮世絵のカラー表紙とモノクロの挿絵34点を横浜開港時の開化絵で知られる歌川貞秀が筆を振った。磯部村と依知村は相模川を挟んだ隣村。「星下り梅」は近隣の信仰を集めた。タイトルの「花咲」は霊梅の紅梅と芸妓名をかけてつけ、下で男の乳児を見つけたとみられる。五七調を景調にした歯切れの良い軽妙な文章で、刊行を機に妙伝寺は江戸城下に知れ渡ったとい

1834年発刊の木版刷り

「花咲」と懇ろとなつた綱五郎は、横恋慕した浪人の訴えで盗人のぬれぎぬを着せられた。だが、盗んだのは糸問屋に奉公する男で、実は綱五郎の生みの親だった。功德でとんでん返しが起こる人情物語。磯部村と依知村は相模川を挟んだ隣村。「星下り梅」は近隣の信仰を集めた。タイトルの「花咲」は霊梅の紅梅と芸妓名をかけてつけ、下で男の乳児を見つけたとみられる。五七調を景調にした歯切れの良い軽妙な文章で、刊行を機に妙伝寺は江戸城下に知れ渡ったとい

今年に入って3作を単行本にして発刊した。問い合わせは日相印刷(042・748・6020)。